

大藏經と禪錄の入藏

柳 田 聖 山

一

臨濟はその示衆の終りに近いところで、文字の中に仏を求めることを退けて、「心動けば疲勞す、冷氣を吸うも益無し」と言っている。『臨濟錄』のうちに、難解の句である。これまで、いずれの注釈も明快でない。

さきごろ、大藏經を整理する必要があるから、番号を示す千字文を読んで、「心動神疲、守真志滿」とあるのに気付いた。第三八九字以下である。臨濟のことは、千字文によつて整理された大藏經の存在を前提している。

大藏經が千字文によつて分類されたのは、智昇の『開元錄』いらいのことである。五千四十八卷四百八十帙という入藏經律論は、このときに決定した。千字文は、国家の權威を伴う經律論の公認番号である。それは、真經と偽經を分つ標準でもある。中国における偽經の歴史は古い。前秦の道安は、すでに二十部三十卷の偽經を記録する。人が作つた經典

を偽經とするのは、先王の古典を尊重して、述べて作らぬという信条による。『開元錄』が真經を決定したのは、正史の芸文志や經籍志の著録に似ている。

しかし、梵經の将来はたえず、その訳出はつづく。『開元錄』は、新來の密教經典を含まぬ。さらに中唐以後になると、禪や淨土教などの実践的な宗派が榮えて、大藏經に対する人々の関心は一変する。臨濟のことはその一例である。かれと同時に宗密は、終南山の草堂寺に大藏經五百函を親書し、別に禪藏百卷を編んだという。智照のあとをついで、円照は新しく『貞元錄』を編んだが、その後は經錄の編集を見ない。

中唐以後の仏教史は、『開元錄』によつて固定化した大藏經を如何に受けつぐかに帰著する。それは、大藏經の本質そのものを問うことでもある。やがて、印刷技術の開発とともに、宋朝は国家事業として五千四十八卷の大藏經を出版し、さらに開元より宋朝の新訳經律論を合せて、その入藏を計

る。ここにはじめて禪録の入蔵を見るのであり、統蔵のもつとも大きい特色の一つとなる。それは、これまでに入蔵していた『弘明集』や『高僧伝』など、此土撰述の域を越えるものである。禪録は、同時代人の書き降しである。それは、述べて作らぬことを信条としたこれまでの大蔵経とどう調和するのであるうか。以下、そうした気運の由来とその展開および意義について考えてみたい。

二

禪録入蔵の動きは、『開元録』の直後に溯る。すなわち、建中末より元和二年（八〇七）にいたつて成立したという、慧琳の『一切経音義』の最終巻に、神秀の『観心論』一卷の名を見る。第九十九巻までは、すべて『開元録』の入蔵書であるが、最終巻の蔵外十七種は、すでに同時代書を含んでいる。『宝王論』三卷や、『金錫決膜論』一卷をはじめ、懷感の『群疑論』七卷や智顗に帰せられる『十疑論』一卷が、それである。『十疑論』は三大部よりも、人々の関心をひいていたらしい。

これらの同時代書とともに、『観心論』が一切経に準ずるものと考えられていたことはたしかである。この書の敦煌写本六種は、大半が經典の様式をもつ冊子である。特殊の扱いを受けていたのである。やがて六祖慧能の語録が、『壇經』

とよばれるようになるのと、それはおそらく無縁でない。『壇經』の敦煌写本は、今のところ一種しか知られぬが、その一冊もまた冊子本である。もともと敦煌写本中の禪録は、一切経に準ずるものであつた。

ところで、当初より經典に準ずることを意図して書かれた禪録は『宝林伝』である。この書は、『六祖壇經』と関係が深いが、まずその章品の名を挙げて、

度衆付法章涅槃繫品第三

第一祖大迦葉章結集品第四

婆耆德政章徵述品第五

などとするのは、意識的に經典の筆法を用いている。そして、意図通りにこの書は最初の入蔵をかちとるのである。すなわち、金刻大蔵経のうちより見出された『宝林伝』巻二の末尾に、つぎのような刊記をとどめる。

長安終南太一山豐徳開利寺の訳経沙門雲勝は、遊行してこの書を携え、第二と第十の二巻を借り忘れた（第二巻は聖胄集で補つたが、第十巻はまだ欠けている）。咸平元年（九九八）に上表して、開元の智昇の経録以後、玄奘代徳の四朝あわせて七人と、我が朝四人の訳経に、御製の三蔵集伝を加えて、すべて一千余巻の入蔵をねがう。

刊記の主語は、雲勝その人であろう。かれの続入蔵上進は、太平興国八年（九八三）に完成した蜀版大蔵経につづくも

のである。雲勝は伝法院の新訳事業に従つた人で、『大藏經隨函索隱』六百六十巻の著があるという。金刻の『宝林伝』には、秦の字号と新編入録の四字がある。秦字は六一五号である。おそらくは、宋初の続藏に新入藏したときのそれを承けるのである。新編入録の四字が金刻大藏經のそれであるとしても、第十巻を欠く金刻の『宝林伝』は、雲勝が入藏を上進した当のテキストを受けている筈である。『至元勘同總録』もまた『宝林伝』を九巻とする。

高麗義天の言によると、隣国の遼では『宝林伝』と『六祖壇經』を偽妄として入藏させなかつたという。かつての偽經の扱いにひとしいこの処置は、逆に二種の禪錄がすでに官版の大藏經に入つていたか、あるいはこれに等しい扱いを受けていたことを推せしめる。たとえば、わが興聖寺本六祖壇經は、宋版を覆したものとされるが、版心に軍の字号をとどめている。軍字は五九八号である。今日、いずれの大藏經目錄にも、軍字の『六祖壇經』を録しない。この事實は、遼朝以前にわれわれの知らぬ続藏の存したことを思わせる。のちにいうように、金刻の『伝灯玉英集』十五巻は、沙と漠の字号に属する。六〇三—四号である。蜀版大藏經の母体をなす開元の入藏經は、四八〇号の英字で終る。従来知られているいずれの宋版よりも大きい金刻の続藏部分は、宋初のそれのおもかげを伝えるものでなければならぬ。『唐書』の芸文志

に、『宝林伝』と『六祖壇經』の名が見えることも、今は一つの証拠となるであらう。

三

いずれにしても、『宝林伝』の入藏もしくはその運動は、やがて『景德伝灯録』の入藏にいたつて、明確な方向を決する。後者がたびたび『宝林伝』の名を挾注としてあげるのも、その続集たらんとしたことをものごたる。『景德伝灯録』三十巻は、景德元年（一〇〇四）に上進され、大中祥符四年（一一一三）に入藏を認められた。あたかも、雲勝の『宝林伝』刊記より十四年目である。

当時、官版の大藏經は完成し、続藏の要望は高まつていた。第二代太宗が贊寧に勅して『大宋高僧伝』を上進せしめたのは太平興国七年であり、あたかも訳經院の設置と同時にある。そうした新しい氣運と成果を集大成したのが、『大中祥符法宝録』二十巻である。この書の編者の一人である翰林学士楊億は、すでに『冊府元龜』一千巻の編者として知られるが、さらに『景德伝灯録』の冊定者でもある。『大中祥符法宝録』巻二十は、『景德伝灯録』の入藏で終つている。

『大中祥符法宝録』は、開元以後の經律論目錄の最新版であり、その綽尾を飾る『景德伝灯録』は、『宝林伝』以来の中国禪宗史の集大成である。その中間に位する『祖堂集』は、

今のばあい問題の外においてよい。『伝灯録』があえて景德の年号を冠するのは、『開元録』や『貞元録』の例をつぐのであり、やはり法宝をつぐという意味をもつ。それは、国家の權威によつて、真經と偽經が分けられたように、今もまた正伝の祖師たることを決する意である。のちに、この書に登載される祖師たちの總数にちなんで、千七百則の公案という考え方がおこるのは、『開元録』の五千四十八卷に比してよいであろう。ここには、ブツダのことばより、祖師たちのそれへの推移が見られる。

こうして、『景德伝灯録』の入蔵は、宋代にはじまる新仏教の動向を決する。周知のように、景祐三年（一〇三六）に成る『天聖広灯録』三十卷、建中靖国元年（一一〇一）に成る『建中靖国統灯録』三十卷、嘉泰四年（一二〇四）に成る『嘉泰普灯録』三十卷が、あいついで入蔵する。これらの四書は、淳熙十年（一一八三）に成つた『宗門聯灯会要』三十卷とともに、やがて『五灯会元』の成立を導くが、年号を冠しない後の二書は、前の四書とかなり性格を異にする。その追及はまた別に試みることにして、今は『景德伝灯録』の入蔵に遅れること三十年、この書を刪して十五卷として、同じように入蔵することとなる王随の『伝灯玉英集』について考えておきたい。

さきによりように、この書もまた金刻大蔵經に含まれて漸

く今日に残つた。それは、宋初の統蔵を受けるものである。いつたい、『伝灯録』三十卷はすでに印經院で摸印されていた。そのことは王随が明言している。しからば、その抄録十五卷の重刊は、そもそも何を意味するのか。印經院は、訳經院の成果を刊行する國家機關であり、ともに開封の伝法院に属した。『伝灯玉英集』の刊行は、そうした國家の權威を示すものであつた。王随によると、この書は仏門における律論の纂鈔や、儒家における史傳の紀略に比せられる。それはたしかに一般道俗の読書の便宜をたすけたかも知れない。しかし、目的はおそらく別にあつた。すでに、『伝灯録』の入蔵のとき、楊億や李維、王曙らの刊削があつた。今あらためて王随が鈔録するのは、かさねて國家の權威を示すものにほかならぬ。いうならば、禪録の國家検定である。國家に都合がよい部分があつて削るのではない。刊削することに意味があるのである。そうした傾向は、この書と時を同じくして上進入蔵される『天聖広灯録』にいたつていつそう強まる。『景德伝灯録』の成立よりわずかに三十年である。いつたいどれだけの新しい記事があろう。新しいのはその巻首に冠せられる御製序である。それは唐の太宗が玄奘にあたえた「大唐三藏聖教序」や、宋の太宗の「御製新訳聖教序」に比すべきものである。禪録の御製序は、『天聖広灯録』が最初である。『伝灯玉英集』の巻首は損して伝わらぬが、『郡齋讀書

志』は、巻尾に詔答ありといつてゐる。内容よりも入藏の權威が問題なのである。こうして、『景德伝灯録』の入藏よりわずかに三十年、禪録の形骸化はすではじまつてゐた。インドより将来される梵經の翻訳とちがつて、国内での編纂にどうしても限度がある。

『天聖広灯録』は、鎮国軍節度使駙馬都尉李遵勗の編である。禪録としては類の少い居士の著作である。『伝灯録』の場合と、事情はよほど異なる。かれの官職は、もちろん楊億や王隨に比すべくもないが、仁宗の御製序はこの書に重きを添えた。景祐四年（一〇三七）、呂夷簡らの奉勅撰になる『景祐新修法宝録』も、とくに御製序のことを記している。もちろん、編者李遵勗が当初よりそれを望んでいたかどうかは明らかでない。しかし、禪と国家の関係がこの時期より一層強まつたことは事実である。たとえば、契嵩の『伝法正宗記』をはじめとする一連の著作は、先に天台の知礼らが禪の伝灯説の根拠について批判したのに答えたものであるが、禪宗側はつねにその權威を国家にもとめた。当時、楊億も李遵勗も、ともに知礼と親交があつたが、天台宗の論書が上進されたり、入藏された記録はない。

いずれにしても、契嵩は『宝林伝』と『伝灯録』および『広灯録』によつてその論議を強め、あるいは逆にそれらの史書の根拠を確立することにつとめたが、かれはまた一方で、韓

愈以来の儒者たちの排仏に答えて、仏教と王法の一体を主張し、『輔教編』三卷を著している。そうした二つの主張が、いつか一つに結びつくことは当然であり、契嵩は『伝法正宗記』の上進に際して、そのことを大いに強調している。

ところで、時代はすでに動きつつあつた。『伝法正宗記』の上進は嘉祐六年（一〇六二）であり、入藏はたゞちに認められたが、その開版は印經院ではなくて、治平元年（一〇六四）に呉郡で完成した。開封にある太平興国寺の伝法院と印經院が廢せられたのは熙寧四年（一〇七二）であり、訳經三藏日称の死によつて、その事業が終熄するのは元豐元年（一〇七八）である。宋朝の財政難は急を上げ、勅版の大藏經刊行にはじまつた宋朝仏教は、おのずから変質をせまられていた。すくなくとも、大藏經開版の主体は、国家より民間に移る。それが再び勅版となるのは、明初のことである。契嵩の活動は、まさしく国家の權威の最後の輝きを示すものであつた。この時にやゝ遅れて、高麗では義天の『新編諸宗教藏總録』が編まれるけれども、禪録はまつたく含まれぬ。麗版の大藏經は、『伝灯録』すら除外した。『祖堂集』は藏外の補版にとどまる。禪録の入藏は、宋朝仏教の特色である。

四

『建中靖国統灯録』の成立にいたつて、禪録入藏の歴史は

新しい段階に入る。

まず、この書は巻首に徽宗の御製序を掲げ、題号の下に東京法雲禪寺住持伝法仏国禪師臣惟白集の自署がある。御製序のことは、すでに『天聖広灯録』に倣うものである。しかし、仏国禪師臣惟白集という自署は、かつて例がない。東京の法雲寺は、先帝の帰依で建つた勅願道場である。この書は当初より輔教の使命を負っていた。

大正藏經に収める元版『伝灯録』の跋によると、『続灯録』の編者は僧を遣して事を採集し、金を受けて名を圓えたという。この跋を書いている長樂の鄭昂は大慧下の居士である。この跋は、『伝灯録』の編者についても異説を出して、真偽のほどは確かでないが、すくなくとも『続灯録』の編集について、好意をもっていないことが判る。

ところで、惟白の仕事としてさらに忘れてならぬのは、『大藏經綱目指要録』八巻の存在である。この書は、『開元録』の五千四十八巻を主体に、宋代の続入藏書若干を加えた大藏經の内容目録である。また、その巻尾に禪門伝録の項目があつて、『宝林伝』より『続灯録』にいたる禪宗史書百巻の由来とその内容について解説している。とくに、禹門の太守楊銜之の『銘系記』なるものにより、仏祖伝法偈の翻訳について論ずるのは、契嵩の『伝法正宗記』の発展であり、大藏經と仏祖の史伝書との接点を求めようとするものである。ま

た、『伝灯録』以来の入藏を強調するのは、もちろん『続灯録』の權威を高めるものである。『大藏經綱目指要録』は、『続灯録』と表裏をなすのである。

惟白がこの書を成したのは、崇寧三年（一一〇三）の春であり、その前年に婺州の金華山智者禪寺で大藏經を閲したことになるという。『建中靖国続灯録』三十巻の完成より二年後に当る。かれは、禪と教との一致をめざしたのであり、その編集態度は明末智旭の『閱藏知津』に似ているが、後者の精緻な体系には及ばない。

むしろ、惟白のそうした主張は、他の背景から考えなければならぬ。すなわち、福州東禪寺版大藏經の開版事業のことである。この大藏經は幸いにもほぼ完全な形で現存している。

『東寺經藏一切經目録』に記載されている刊記によると、出版は元豐三年（一〇八〇）が最初であるが、淡字号（六八）の『仏説光讚般若波羅蜜經』巻九とともに、杜字（四八一）より羅字（四九〇）にいたる『法苑珠林』百巻と振字（五一）より世字（五一三）の『伝灯録』が、すでにこの年に出ている。千字文の字号のはじめをなす『大般若經』六百巻は、残念ながら後の開元寺版による補充であつて、その出版年時を知り得ないが、それらが元豐三年に出たとしても、この大藏經は『開元録』以来の母体にあわせて、その続藏部を最初に刷りはじめたことが判る。それは当時の人々の関心をあらわす。とく

に、『伝灯録』に対する要望は強い。紹興初年になると、この書は大藏經以外に二度も単行で重刊される。東禪寺版大藏經につづく開元寺版もまた『伝灯録』を含んでいた。

そうした禪録に対する関心は、東禪寺版における『建中靖国統灯録』および『大藏經綱目指要録』の刊記にもうかがわれる。すなわち、前者は崇寧二年の冬より三年にいたる出版であり、後者のそれは崇寧四年である。いずれも上進より三年後である。宋朝の財政事情からいつて、入蔵は認めたが出版は東禪寺に任せたのである。開封の印經院は、すでに完全に機能を停止していた。東禪寺は、それらの国家機関の權威をひきついだのである。したがつて、大藏經の出版機能が民間の道俗の手に移ると、禪録の入蔵の事情もまた變つてくる。

たとえば、東禪寺版大藏經の実字号（五二四）に収められる『筠州黄檗山断際禪師伝心法要』と『黄檗断際禪師宛陵録』がそれである。この部分は大觀三年の出版であるが、これらの入蔵にいつては、他に何の資料もない。惟白の『大藏經綱目指要録』もまた何も語らぬ。入蔵は、あるいは任意に行われたのでないか。東寺の本は目下これを見る機会がないが、知恩院所蔵の開元寺版によると、実字号は筠州黄檗山断際禪師伝心法要という標題の前に、広灯録第一帙とある。編者はこれらの二書を『広灯録』の一部とする形をとつたのである。

周知のように、大正藏經が収める元版の『伝灯録』は、その巻九の末尾に『黄檗希運禪師伝心法要』を附している。裴休の序を含めて、流布本の首部十段に当る。慶曆戊子（一〇四八）の歳に南宗天真が添えたものである。これもまた公式の入蔵ではない。東禪寺と開元寺の大藏經が『伝心法要』と『宛陵録』を収めたのは、当時の関心によるのである。後代の大藏經は、この二書のみならず、『広灯録』以下の公式入蔵の禪録まで除いてしまつた。

五

今日、統藏經に収める『建中靖国統灯録』は、崇寧二年出版の本である。卷十三の刊記をみると、都勾当蔵（主）沙門靈肇、都勧首住持伝法沙門普明、同勾当住聖泉寺伝法沙門紹登などの列名がある。大半は伝歴を明らかにし得ないが、中央の普明は、黄竜慧南の四世に当る。同じく統藏經に収める『広灯録』は、先にいうように大觀三年の出版であるが、刊記に見える福州大中寺の広慧大師達果は、やはり黄竜慧南の三世である。この人は、紹興初年に独力で『伝灯録』を重刊している。福州東禪寺の大藏經は、その開版に多くの禪宗関係者が参加したとおもわれる。禪は、すでに時代の仏教であつた。それは同時に禪の性格を決する。当時の禪は大藏經を踏まえたそれであつた。

わが柴西が入宋して黄竜の法をつたえたのは、かならずしも当初の目標ではなかつたとおもわれる。かれの大きい関心の一つは、宋版大蔵經の将来にあつた。かれがじつさに読んだ禪録は、あまり多い数ではないが、その中に『宗鏡録』と『大蔵經綱目指要録』がある。いずれも東禪寺版に収まっている。彼は『興禪護国論』の世人決疑門に、禪人の語録千余卷は世間の抄出に比すべきものとしている。抄出は大蔵經あつてはじめて意味がある。さらに建立支目門の禪院行事のうちに、毎日一切經一卷を奉読す、もし一寺に百僧あれば則ち一年に一切經六藏を終るといつている。柴西の仏教は、宋代の大蔵經を踏まえている。『林間録』に伝えるところによると、黄竜の師であつた棲賢澄謁は晩年に大蔵を読むこと三度で、坐して閱するのを不敬とし、立ちて誦し行いて披いたという。黄竜の法的一端を知るに足るであらう。

さらに、宋代の大蔵經の特色は、『大慧語録』三十卷の入藏をもつてその最とする。それは同時代書そのものである。『広灯録』以後の禪宗史書は、後の大蔵經で姿を消すが、『大慧語録』の入藏はさらに雪竇や円語の語録を伴い、遂に『古尊宿語録』四十八卷の入藏となる。それらについては、すでに一部私見を出している。また他の機会に継続して考えたい。

(昭和四五年度、文部省科学研究費による)

大蔵經と禪録の入藏(柳田)

執筆者紹介(二)

- | | |
|--------|-------------------|
| 平川 彰 | (東京大学教授・文博) |
| 石田 充之 | (竜谷大学教授・文博) |
| 小川 弘貫 | (駒沢大学教授・文博) |
| 金治 勇 | (四天王寺女子短期大学教授・文博) |
| 小川 貫弑 | (竜谷大学教授) |
| 牛場 真玄 | (叡山学院講師) |
| 滋野井 恬 | (大谷大学助教授) |
| 松尾 宝作 | (金沢大学社会教育研究室参与) |
| 増田 英男 | (明治薬科大学教授) |
| 土橋 秀高 | (竜谷大学教授) |
| 河野 憲善 | (島根大学教授) |
| 宇治谷 祐顕 | (同朋大学教授) |
| 柳田 聖山 | (花園大学教授) |
| 静谷 正雄 | (竜谷大学教授) |
| 玉山 成元 | (大正大学助教授) |
| 藤田 清 | (四天王寺女子大学教授) |
| 小野 正康 | (杏林大学教授・文博) |
| 望月 一憲 | (東京医科歯科大学教授) |
| 村上 真完 | (東北大学助教授) |
| 山崎 次彦 | (三重県立大学助教授) |

(二一九頁へつづく)